

1-② 田山花袋旧居

館林市城町



第二資料館に移築された田山花袋旧居 写真1-2-39



田山花袋旧居位置図



移築前の田山花袋旧居（昭和40年代） 写真1-2-41



館林城絵図（秋元氏時代）に記載された石川宗内家（赤枠の部分） 写真1-2-40

1 建物の概要と歴史

「田山花袋旧居」は、自然主義文学者として名高い田山花袋（明治四年生、本名録弥）が、明治十二年（一八七九）から十九年（一八八六）までの少年時代に住んだ家である。茅葺き屋根の武家住宅の一つで、元は館林城惣郭の裏宿（現城町）にあった。秋元氏時代の館林城絵図（写真1-2-40）では、秋元家臣の石川宗内（十七俵二人扶持）の屋敷となっており、北は惣郭を囲む土塁となっていた。石川宗内は、花袋の母田山つゆの姉さだの婿にあたる。田山家も秋元家臣（十七俵二人扶持）で、幕末期は外伴木（現尾曳町）に住んでいた。

明治維新後は、石川家から同藩士の程原家の屋敷となった。程原家も石川家と田山家の親戚にあたり、明治十二年に田山家の屋敷となった。田山家がこの家に移り住んだ理由について、花袋は小説『ふる郷』（明治三十二年）の中で、①小学校に近いこと、②外伴木の家が古くなったこと、③外伴木の家は沼が近くにあり子どもには危険な場所だったため、と述べている。

明治十九年に一家の家計を支えていた兄

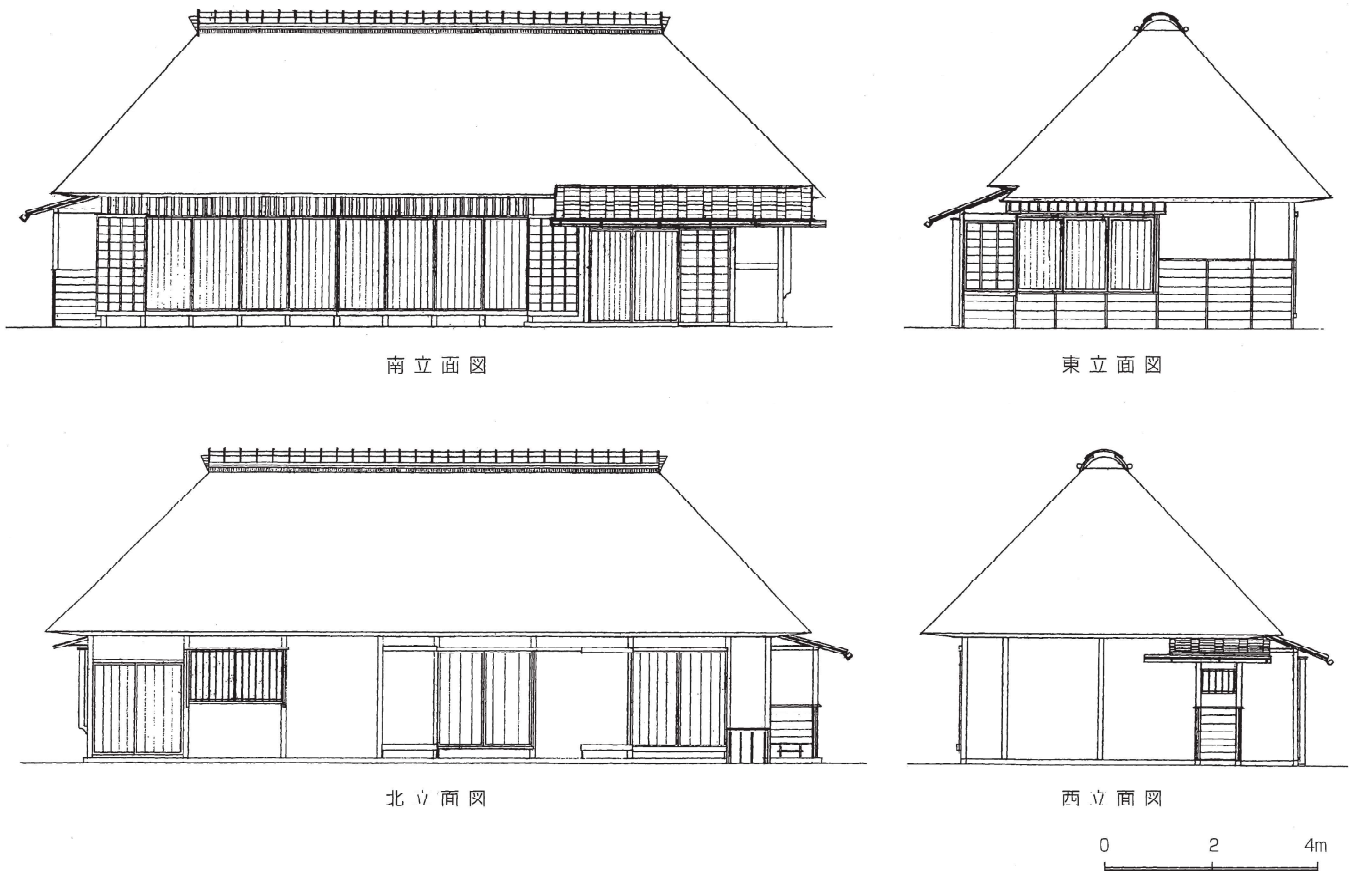


図1-2-25 田山花袋旧居立面図

実弥登が東京で就職することになり、一家で上京することになった。この時、実弥登から程原要三郎にあって「建家売渡証」（明治十九年七月付）があり、再び程原家へ売却したことがわかる。その後、明治二十五年（一八九二）に旧藩士尾形寛三へと売却された。

昭和五年（一九三〇）に花袋が没した後、館林で「田山花袋顕彰会」が結成されるなど、顕彰活動が活発になった。昭和三十四年（一九五九）に市の所有となり、昭和四十六年（一九七二）に市の史跡に指定された。昭和五十六年（一九八一）に保存と活用を考慮し、館林市第二資料館（城町）に移築された（『文化財総合調査 田山花袋旧居―保存修理（茅葺屋根葺き替え）調査報告書』）。

## 2 建築・改修の時期

江戸時代後期に建てられたと推定されるが、棟札等の記録がなく、正確な建築年代は不明である。

市第二資料館に移築後は、平成十年度（一九九八）と平成二十一年度（二〇〇九）に茅葺き屋根の全面葺き替えと一部葺き替えを行うなど、定期的な保存修理を行っている（第四章三節〈4-②〉参照）。

## 3 規模と構造

○構造 木造平屋建て 茅葺き寄棟屋根

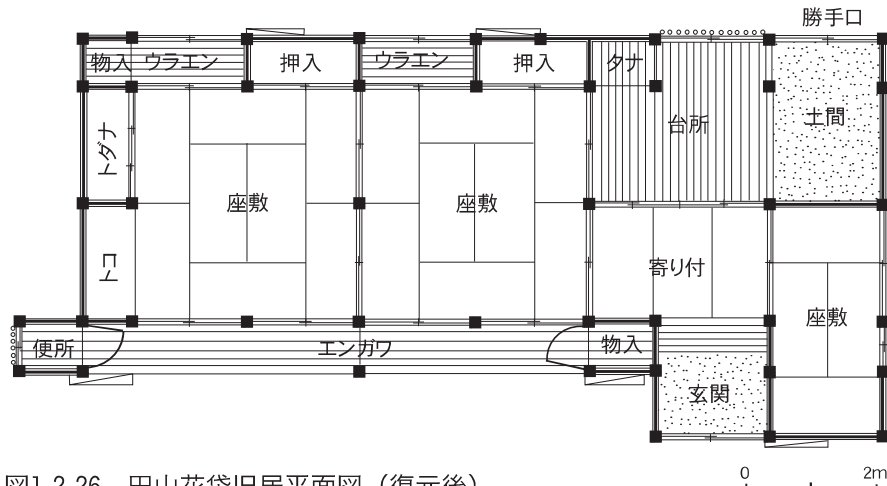


図1-2-26 田山花袋旧居平面図（復元後）

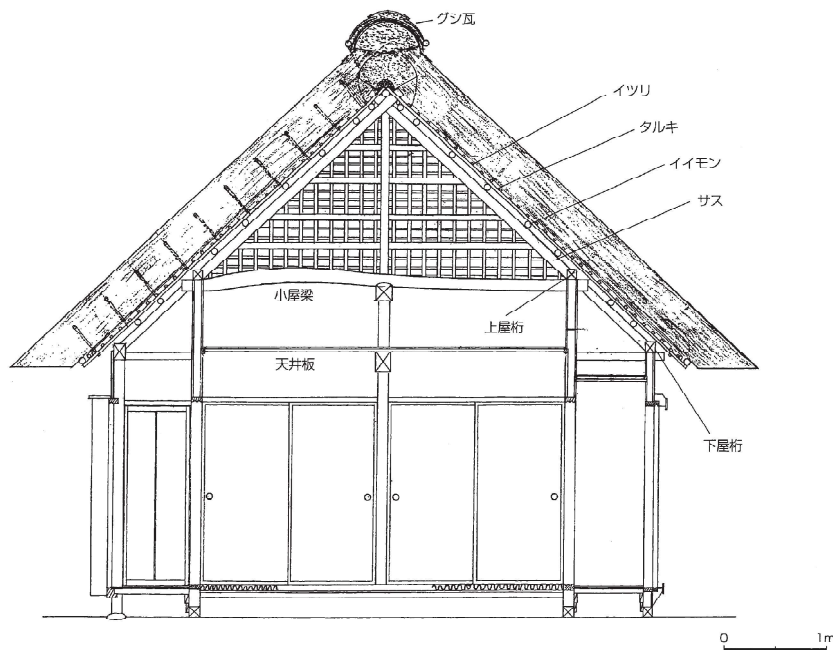


図1-2-27 田山花袋旧居断面図（矩計図）

○面積 七四・二五<sup>2</sup>m

一列型間取の平入で、解体移築以前の玄関は南向きである。間口（桁行）七・五間（一三・六二<sup>2</sup>m）、奥行（梁間）三・五間（六・三五<sup>2</sup>m）で、間取りは玄関の土間に続いて三畳（寄り付）があり、玄関右に四畳が一間、玄関左に八畳が二間続く。奥の八畳には床の間がある。玄関寄り付の奥は板の間と土間で台所となっている（図1-2-26）。

構造は、「旧館林藩土住宅」と同様に、梁間は上屋と下屋に二分した架構となる（図1-2-27）。小屋組は小屋梁の上にサス（扱首）を組み、茅を葺く。柱の径は三・三寸（約一〇cm）角とし、小屋梁の寸法が末口五寸（約一五cm）、サスの直径は末口四寸（約一二cm）となっている。基礎は玉石で、玉石の上端から小屋梁の上端まで一〇・六六尺（約三・二三m）とし、玉石の上端から軒桁上端までは八・七四尺（約二・六五m）である。

外壁は土壁（一部杉下見板）、内壁は土壁漆喰仕上げである。天井は玄関・和室・床の間・押入れは竿縁天井で、縁側・台所・床の間・便所は軒裏表しとなる。



田山花袋旧居と田山花袋の胸像

写真1-2-45



解体中の田山花袋旧居  
(屋根の茅を降ろしたところ)

写真1-2-42



復元後の玄関脇の座敷 (四畳)

写真1-2-46



解体前の台所

写真1-2-43



復元後の奥の座敷 (八畳)

写真1-2-47



解体前の奥の座敷 (八畳)

写真1-2-44

他に農家のごとき広き台所を備へたり」と記している。さらに花袋は、六畳には祖父が机に向かい、奥の八畳の高いところには神棚があり、玄関右の四畳半は花袋の書齋となったと書いている。実際の間取りは八畳が二間と四畳であるが、『ふる郷』の記述により、田山家でこの家をどのように使っていたのかを知ることができる。

#### 4 特徴

前述の「旧館林藩士住宅」に比べ、間口が一間少ないが、同じく中級武士の住居の特色を持つ。「横一列型」の間取りとなるが、式台の有無は不明である。

田山花袋は小説『ふる郷』で、この家について「故郷を去りて後、われは幾度そのなつかしき一軒の茅葺屋根を夢にや見けん。(中略) わがこの家は八畳、六畳、四畳半の三間にて、この